

箱庭制作者と評定者における状態不安と 作品の印象との関係

遠藤 歩¹ 東北大学

The relationship between state anxiety and the impression of Sandplay productions in
terms of factors of the makers and raters

Ayumu Endo (Tohoku University)

This study investigated the relationship between the state anxiety of Sandplay makers and raters, and the raters' impressions of the Sandplay productions. The S-Anxiety subscale of the STAI was administered to college students. One group ($N = 20$) created Sandplay productions which were photographed. Three works were selected from higher S-Anxiety subjects (H-works) and three from lower S-Anxiety subjects (L-works). Then another group of 58 college students were asked to rate these Sandplay productions using the SD method. Factor analysis extracted three factors of Flexibility, Integration, and Activity. The raters were divided into two groups based on their S-Anxiety scores, and their subscale scores were examined using ANOVA. Significant main effects for the makers involved Flexibility and Activity (L-works < H-works). This suggests that the S-Anxiety and ego function of the makers influence their works. Furthermore, an interaction was found with Integration. Higher S-Anxiety raters rated the Integration of L-works lower than did the lower S-Anxiety raters. This indicates that higher S-Anxiety raters observed the free expression of lower S-anxiety makers from a partial perspective.

Key words: anxiety of the Sandplay maker, anxiety of the rater, impression of the Sandplay production.

The Japanese Journal of Psychology
2012, Vol. 82, No. 6, pp. 540-546

箱庭療法において、表現された作品は制作者の意識と無意識の交差する領域に生じてきた心象であり、それは具象性、直接性、集約性といった特徴をもっている（河合，1969）。これらの特徴をもつ作品を“全体の感じ、布置、用いられたものの象徴的意味、作品の継列などによって見てゆくこととなる”（河合，1966）。岡田（1969）は、この“全体の感じ”を捉えようと形容詞対 20 項目から成る箱庭作品の印象評尺度（Table 1）を作成した。その尺度を用い、健常群と精神疾患群の箱庭作品を心理療法従事者に評定してもらい、Osgood の D-Method により次元抽出を行った。その結果、“統合性次元”、“充実性次元”、“力量性次元”、“柔軟性次元”の四つの次元を抽出した。

そして、精神疾患群の作品は、すべての次元で健常群より低く評定されており、印象による診断性は高いと報告している。

制作者の要因は精神疾患の他に、精神発達について検討されてきた。岩堂・奈比川（1970）は、知的障害児童群と普通学級児童群の作品の印象を比較した結果、知的障害児童群の作品は全体的感じにおいて構成力、創造性その他の点で劣る印象を与えると指摘している。また、普通学級児童群を行動評価の優劣によって比較した結果、行動評価に問題のある児童は、かたいてい、空虚な作品を作るとしている。相馬・行方（1989）は中学生・高校生の知的障害児に動物園を作る制作課題ありと課題なしの箱庭を作ってもらい印象評定を行った結果、知的障害児は知的な程度が高いとポジティブな作品を制作するが、より自由な状況ではネガティブな作品が多くなるとしている。

作品に対してのもつ“全体的な感じ”が意味を有していることが示され、精神疾患や精神発達については検討されてきたが、感情という重要な心的特性については扱われてこなかった。カラーージュでは印象と感情に

Correspondence concerning this article should be sent to: Ayumu Endo, Graduate School of Education, Tohoku University, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980-8576, Japan (e-mail: au6.endo@gmail.com)

¹ 本研究を進めるにあたり、御指導くださいました文教大学の岡村 達也教授、東北大学の安保 英勇准教授に心より感謝申し上げます。

Table 1
箱庭作品印象評定項目（岡田，1969，p. 153，表 1）

1 雑然とした - まとまった	11 不安定な - 安定した
2 かた い - 柔らかい	12 暗 い - 明る い
3 貧弱な - 豊かな	13 弱 い - 強 い
4 女性的 - 男性的	14 空虚な - 充実した
5 浅 い - 深い	15 不調和な - 調和した
6 こせこせした - のびのびした	16 消極的 - 積極的
7 静的 - 動的	17 アブノーマルな - ノーマルな
8 未熟な - 成熟した	18 さびしい - にぎやかな
9 閉鎖的 - 開放的	19 緊張した - くつろいだ
10 小さい - 大きい	20 不愉快な - 愉快な

ついて扱った研究がある。日本のコラージュ療法は箱庭療法を直接のモデルとしており、箱庭療法をもっと簡便に利用する方法を模索しているうちに見出されたものであり（森谷，2004），箱庭療法と関連が深い。荒井（2004）は，大学生の感情状態を測定し，コラージュを制作してもらうという手続きを2度実施した。そして，感情状態の変化が大きかった大学生の作品に対し，印象評定と事例的な分析を行った。その結果，感情に沿うように作品の印象が変化する場合，感情と逆方向の印象を与える作品に変化する場合，そして，感情が反映されない場合の三通りの影響を見出した。箱庭においても，制作者の個々の感情は特有の反応を生み出し，作品から受ける印象に影響すると考えられる。

何を基本感情とするかは研究者間で一致していないが，日本では寺崎・岸本・古賀（1992）が多面的感情状態尺度の作成において，“抑鬱・不安”，“敵意”，“倦怠”，“活動的快”，“非活動的快”，“親和”，“集中”，“驚愕”の8因子を抽出し，感情の基本的な構造としている。中でも不安は，不安障害など生活に支障をきたす場合も多く，臨床的に重視されている。しかし，箱庭療法の事例研究，基礎研究において不安をテーマとして扱ったものは見当たらない。本質的な接近法である事例研究にとっても，より妥当性のある解釈のための基礎的なデータは有用であろう。そこで，本研究では印象評定を用い不安について検討してゆく。不安は，特性不安と状態不安に分けられる（Spielberger, 1966）。状態不安は緊張，懸念，悩みなどの主観的感情と自律神経系の覚醒または興奮によって特徴づけられる。箱庭制作時の今ここで生じている制作者の体験が，箱庭作品に影響すると考えられるため，特性不安ではなく状態不安を取り上げてゆく。

なお，評定者の要因も併せて検討してゆく。箱庭作品に対する評定者間の印象評定項目の一致度は，大石（1980）によれば約65%—90%，相馬・行方（1989）によれば20項目中12項目は50%以下であった。一致度の幅は評定者の要因によるものと考えられる。木

村（1985）は治療者の治療経験，性差，合理-非合理や外向-内向といったタイプに印象の差が生じる要因を求めた。20作品に実施した7項目の印象評定を比較した結果，どの要因も一部の項目に差は認められたが，大部分に差はなかった。しかし，箱庭療法において，治療者の感じ方は無視できないし，無意識のうちに治療の展開に影響を与える治療者側の要因もあるだろう（木村，1985）。作品の印象に関わるものに，治療者の感情が考えられる。心理臨床において，クライエントと治療者の感情は治療の展開を大きく左右する要因である。多くの心理療法で重視されている共感とは，“クライエントの内的状態を感じ取り，さらにセラピストが自分の中に生じたその体験を吟味すること”（角田，2004）とされ，それは，感情の共鳴体験であるといえる。箱庭療法を実践する治療者の態度においても，作品は共感的に見てゆくものであり，印象と関係すると考えられる。共感について小林（2005，p. 681）は，“治療者に生じた体験過程は，クライエント自身に生じた体験過程に近いものである”と述べている。すなわち，クライエントが不安を体験している時，治療者は不安に近いものを体験しているといえる。ここでは制作者の状態不安について検討するため，評定者も状態不安について取り上げてゆく。

以上から，本研究では次のことについて検討してゆく。制作者の要因に関しては，先行研究では健常者や精神発達の進んだ制作者の作品は，対照群に比べ高く評定される傾向が報告されている。このことから，仮説として，低状態不安制作者の箱庭作品は，高状態不安制作者の箱庭作品に比べ高く評定されると考えられる。なお，評定者の要因に関しては，先行研究では評定者の感情を扱ったものは見当たらないものの，一般に良い気分ときは対象に対し肯定的な評価・判断を行い，気分の良くないときは評価や判断が否定的になりやすいといった傾向が幅広く認められているように（池上，1997），感情と認知には関連がある。このことから，低状態不安評定者は高状態不安評定者に比べ，箱庭作品を高く評定すると考えられる。この評定者の

要因については、制作者と評定者における状態不安と印象の相互作用と共に、探索的に検討してゆく。

制作者、評定者は大学生とした。大学生の不安と臨床的に問題となる不安は、その強さや対象の広さ、日常生活への侵襲度において区別されるが、本質的には同じものと考えられている。また、木村（1985）の研究から、大学生が評定者であっても基本的な印象は専門家と変わらないといえる。実践から離れた設定ではあるが、基礎的なデータから一般的な心理的メカニズムを捉えることで、実践における具体的な問題性を検出し、治療的な介入方針を立てる基盤になりうる。未だ探索段階ではあるが、意義のあることと考えられる。

方 法

作品の収集

制作者 A 大学人間科学部の大学 1—4 年生。男性 7 名、女性 13 名の計 20 名 ($M=20.30$ 歳, $SD=1.08$ 歳)。箱庭の制作経験、および箱庭療法の専門的知識を有している人は、あらかじめ制作者の対象から除外した。制作者は心理学を専攻しており、一部は箱庭療法の発展過程など概要程度を講義で受けたことがあった。

手続き 面接は個別に実施した。State-Trait Anxiety Inventory (STAI) の日本語版 (清水・今栄, 1981) の State-Anxiety (状態不安) を行った後、“ここにある玩具や砂を使って、砂箱に何かを作ってください”と教示し、箱庭を制作してもらった。時間制限は設けず、制作者が終わりとするまで行った。作品完成後、制作者の体調の確認、作品の振り返りを行い、面接を終了した。

作品の選択基準

印象評定の対象となる作品数が増えることによる

評定者の負担を考慮し、状態不安の結果から、20 作品の内、高状態不安の上位 3 名の作品 (H 作品) と、低状態不安の上位 3 名の作品 (L 作品) を印象評定の対象とした。各 1 作品を例示する (Figure 1, Figure 2)。H 作品の制作者 3 名 (男性 2 名、女性 1 名) の状態不安得点は 55, 55, 47 ($M=52.33$, $SD=4.62$) であり、L 作品の制作者 3 名 (男性 2 名、女性 1 名) は 26, 29, 31 ($M=28.66$, $SD=2.52$) であった。

印象評定

評定者 A 大学人間科学部の大学生 3—4 年生。男性 16 名、女性 42 名の計 58 名 ($M=21.32$ 歳, $SD=1.13$ 歳)。箱庭療法の専門的知識を有している人は、あらかじめ評定者の対象から除外した。評定者の一部は心理学を専攻しており、箱庭療法の発展過程など概要程度を講義で受けたことがあった。

調査内容 2 部構成の質問紙を実施した。第 1 部では 1—6 ページ目まで各ページに教示、箱庭作品の写真 (光沢仕様, L 版) 1 枚を添付し、下にそれを評定する 7 段階 SD 法の尺度を載せた。第 2 部では STAI の状態不安尺度を載せた。

印象評定は、岡田 (1969) の尺度を用いた。その項目は、(a)箱庭のスライド 14 枚を提示し、Osgood の 3 因子と相良の 4 因子から選ばれた 16 項目で評定してもらい、この中で正規分布に近いもの、(b)箱庭療法の実践家に経験上重要と思われる形容詞を制限連想させたもの、(c)安定性、統合性、動き、明暗などと、Osgood の 3 因子と相良の 4 因子が含まれるように考慮したものの、という点から選ばれた。この尺度は箱庭の印象評定尺度の中で制作過程が明らかにされており、もっとも妥当なものと考えられた。採点は Table 1 の形容詞対の左側から右側に 1 点から 7 点を与えた。

評定者の弁別基準

評定者 58 名の状態不安 ($M=44.34$, $SD=10.31$)



Figure 1. 高状態不安制作者による作品の一例



Figure 2. 低状態不安制作者による作品の一例

Table 2
箱庭作品印象評定項目の因子構造（最尤法，直接オブリミン回転）

項目	Factor 1 (柔軟性)	Factor 2 (統合性)	Factor 3 (活動性)	共通性
19 緊張した - くつろいだ	.80	.06	.02	.64
2 かたい - 柔らかい	.77	.09	.08	.54
12 暗い - 明るい	.76	.06	.21	.74
4 女性的 - 男性的	.70	.05	.05	.45
9 閉鎖的 - 開放的	.68	.03	.21	.64
20 不愉快な - 愉快な	.64	.01	.25	.61
6 こせこせした - のびのびした	.53	.26	.13	.48
17 アブノーマルな - ノーマルな	.43	.34	.05	.37
15 不調和な - 調和した	.17	.75	.00	.62
11 不安定な - 安定した	.21	.74	.07	.59
8 未熟な - 成熟した	.20	.71	.14	.56
1 雑然とした - まとまった	.12	.59	.02	.34
16 消極的 - 積極的	.24	.18	.73	.69
13 弱い - 強い	.07	.07	.59	.35
10 小さい - 大きい	.07	.08	.54	.37
因子相関行列	Factor 1	1.00		
	Factor 2	.14	1.00	
	Factor 3	.45	.33	1.00

を，その得点から二群に分けた。清水・今榮（1981）によって報告された大学生 618 名の状態不安（ $M=42.81$, $SD=9.84$ ）のほぼ平均 $+1/2SD$ を基準とし，48 点以上を高状態不安評定者（評定者 H 群， $n=21$ ），47 点以下を一般状態不安評定者（評定者 O 群， $n=37$ ）とした。

結 果

因子分析結果

SD 法で用いた 20 項目に，最尤法，直接オブリミン回転による因子分析を行った。因子数は固有値 1 以上の基準を設け，スクリープロットにより固有値の減衰率と因子の解釈可能性から 3 因子が採択された。因子負荷量が .35 未満の項目と .35 以上の因子負荷量が複数の因子にかかる項目の計 5 項目を除き，再び行った（Table 2）。Factor 1 は，“かたい - 柔らかい”，“暗い - 明るい”などが含まれ，作品の豊かさや明るさなどを示していた。岡田（1969）の“柔軟性次元”を構成する 6 項目の内 5 項目が重なっており，“柔軟性”と命名した（ $\alpha=.75$ ）。Factor 2 は，“不安定な - 安定した”，“雑然とした - まとまった”などが含まれ，作品の全体的な調和やまとまりを示していた。岡田（1969）の“統合性次元”を構成する 5 項目の内 3 項目が重なっており，“統合性”と命名した（ $\alpha=.78$ ）。Factor 3 は，“弱い - 強い”，“小さい - 大きい”が含まれ，制作者のエネルギーに関するものであった。岡田

（1969）の“力量性次元”を構成する 4 項目の内 2 項目が重なっており，また，“消極的 - 積極的”が動きを示していることから“活動性”と命名した（ $\alpha=.68$ ）。“柔軟性”と“統合性”（ $r=.14$ ），“統合性”と“活動性”（ $r=.33$ ）には弱い相関がみられた。また“柔軟性”と“活動性”（ $r=.45$ ）には中程度の相関がみられた。

因子ごとの分析結果

H 作品・L 作品（作品内：同一者による評定）×評定者 H 群・O 群（評定者間）を独立変数，各群の各因子の項目平均を従属変数とした 2×2 の分散分析を行った（Table 3）。その結果，“柔軟性”（ $F_{(1, 56)}=94.50$, $p<.001$ ），“活動性”（ $F_{(1, 56)}=31.00$, $p<.001$ ）において制作者の状態不安の主効果がみられた。両因子とも H 作品 > L 作品であった。“統合性”では有意な交互作用（ $F_{(1, 56)}=6.91$, $p<.05$ ）と制作者の状態不安の主効果（ $F_{(1, 56)}=8.42$, $p<.01$ ）がみられた。Bonferroni 法により単純主効果を分析した結果，有意差がみられたものは L 作品で評定者 O 群 > 評定者 H 群，評定者 H 群で H 作品 > L 作品であった。

考 察

因子分析結果について

因子分析の結果，“柔軟性”，“統合性”，“活動性”の 3 因子が抽出された。クロンバックの α 係数によ

Table 3
因子ごとの分散分析結果

Factor		M(SD)		F 値	評定者群	作品
		評定者 O 群	評定者 H 群			
柔軟性	L 作品	3.61(0.51)	3.70(0.51)	0.05	1.26	94.50***
	H 作品	4.53(0.54)	4.66(0.40)	(ns)	(ns)	(H>L)
統合性	L 作品	4.18(0.69)	3.76(0.61)	6.91*	0.31	8.42**
	H 作品	4.22(0.70)	4.50(0.72)		(ns)	(H>L)
活動性	L 作品	3.73(0.64)	3.48(0.64)	1.12	0.99	31.00***
	H 作品	4.34(0.60)	4.37(0.71)	(ns)	(ns)	(H>L)

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

り内部一貫性を確認し、おおむね信頼性は保たれていると判断した。項目間の比較を行った木村（1985）の研究では、治療経験による印象の差が表れにくいことが示されている。しかし、因子数の観点から検討すると、心理療法従事者による印象評定で4因子が抽出された岡田（1969）の研究と異なっていた。評定者が大学生と心理療法従事者では、因子のまとまり方が異なることが示唆された。作品を捉える視点は、箱庭療法に精通するにつれて多角的になり、作品に抱く印象は分化してゆくと思われる。心理療法従事者に比べ、大学生の視点は分化しておらず、作品を大まかにとらえたため3因子となったのであろう。抽出されなかった“充実性次元”は、経験を積むことで分化してゆく印象ではないだろうか。

因子ごとの分析結果について

“柔軟性”と“活動性”は、制作者の状態不安の主効果が認められ、両因子ともH作品>L作品であった。先行研究では、印象の差は制作者の要因である精神疾患や精神発達の見点から検討されてきた。本研究のように、制作者の精神的健康度や精神発達に大きな差がない場合、不安に対処する心的機能の自我について考慮する必要があるだろう。箱庭療法が誕生した時から、箱庭表現と制作者の自我の関係については論じられてきた。例えば、Kalff（1966 山中監訳 1999）は、箱庭では、自我発達の過程は“動物的・植物的段階”、“闘争の段階”、“集団への適応の段階”の三つの段階を辿り表現されることを多くの事例によって示した。箱庭表現と自我の密接な関係を踏まえると、箱庭作品に対してもつ印象と自我の関係について検討することは意義のあることと考えられる。

本研究の制作者の自我は、大学生活が営める程度に健全に機能しており、高状態不安の時には、その防衛機能は活発になるであろう。河合・中村（1993）によれば、“ノーマルな人の自我のコントロールの上において表現された作品は、深いものは出てきにくく、形のととのったものを置く”とされている。健常な大学

生は、高状態不安によって自我のコントロール力が強まり、表現が抑制され、形のととのった作品を志向したのではないだろうか。また、自我は高い不安を軽減しようとしたと考えられる。荒井（2004）はコラージュ研究において“特に、抑うつ・不安というネガティブな感情が高まった時には、それを打ち消そうとする逆方向のイメージの表現がなされる場合がある”と報告している。制作者の自我は、高状態不安から回復するため、内的な充足感を満たす創造行為を動機づけられたのではないだろうか。他方、低状態不安制作者は、緊張が緩み、自由な感情状態であったといえる。この状態の自我について、退行という機能から捉えてゆく。Kris（1952 馬場訳 1976）は創造活動における退行の働きを積極的に評価し、自我による自我のための退行（regression in the service of the ego）とよんだ。この退行は病的な退行と異なり、自我による随意的統制下におこり、しかもその退行が一時的ですみやかに現実に復帰する弾力性を備えている。そして、この退行と回復を通して、自我は無意識から生産的なエネルギーを獲得する（小此木・馬場、1989）。箱庭療法は、箱、砂、母子一体性（Mutter-Kind-Einheit）と比喩される治療者との関係性など、制作者が退行する要因を構造的に有している。また、自由であると同時に保護された一つのある空間（freien und zugleich geschützten Raum）で治療は進むとされている。すなわち、より自由な感情状態において、この退行は促進される。箱庭作品の制作過程において、低状態不安の大学生は、自我のコントロールが適度に緩み、自我による自我のための退行が促進されたものと思われる。そして、感情が解放されることで創造活動や情緒体験が活発になり、自由な表現が可能になったのではないだろうか。こうした高状態不安による防衛や低状態不安による退行といった内的なメカニズムにより、“柔軟性”と“活動性”はH作品>L作品になったと考えられる。

自我の観点から捉えれば、先行研究と本研究の結果は矛盾しない。自我による自我のための退行は、健康で自律的な自我が存在することで可能になる。健常者

と比べれば、精神疾患や発達障害を有する人の自我には脆弱性がある。箱庭療法は自我への影響が大きく、自らが表現したものを自我によって再統合される程度を超えてしまう制作者への適用には慎重であるべきとされている(河合, 1969)。また、退行が生じやすい箱庭療法の構造において、健康で自律的な自我に支障があるならば、病的な退行が生じやすいと考えられる。病的な退行状態において、他者が理解可能なように作品を推敲する力を働かせることは困難である(Kris, 1952 馬場訳 1976)。先行研究における精神疾患や発達障害の制作者は、自我の脆弱性から再統合が困難な表現、あるいは、病的な退行が生じ評定者にわかりにくい作品となり、健常者の作品と比べ印象評定値は低くなったのではないだろうか。

“統合性”では交互作用がみられ、制作者と評定者における状態不安と印象に関係があることが示された。評定者 H 群において、H 作品 > L 作品というのは他因子と共通していたが、L 作品において、評定者 O 群 > 評定者 H 群であった。この点にのみ交互作用がみられたことを考えれば、気分に沿った評価・判断になると単純に考えられるのではなく、L 作品との関係を考えてゆく必要がある。先に述べたように L 作品は、制作者の低状態不安による退行から、H 作品に比べ形のととのっていない作品になったと考えられ、調和やまとまりを捉えにくい作品であった。また、不安な人は置かれた状況の中の特定のものに注意を向け、それ以外のものを見落とす傾向がある(Sadock & Sadock, 2003 井上・四宮監訳 2004)ように、評定者 H 群は、その高状態不安によって全体的に見る視点が狭められていたと考えられる。こうした相互の関係により、評定者 H 群は、評定者 O 群に比べ、L 作品の“統合性”を捉えることが一層難しかったと思われる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、制作者の状態不安による印象評定の差と評定者の状態不安との関係について検討した。その結果、“柔軟性”と“活動性”では、H 作品は L 作品より高く評定され、また、“統合性”では、評定者 H 群において、H 作品は L 作品より高く評定されることが示された。そして、これらの関係は、制作者と評定者の自我機能と箱庭療法の治療構造による影響を受けていると考えられた。これらについて基礎的な観点から示せたことが本研究の貢献であるが、今後、心理臨床の実践につなげるためには多くの問題点と課題がある。

第一に、自我以外の観点からは未検討という点である。玩具数や玩具が有する象徴的意味といった作品の特徴、あるいは制作者や評定者の内省などの観点と印象との関係について検討することが必要である。具体

的なデータから捉えることで、作品に対してもつ印象のメカニズムをより明確にしうるだろう。第二に、作品が臨床実践に即していなかった点である。本研究の制作者は、学生生活を営める程度に健康な大学生であった。STAI による不安の判定は臨床上の妥当性をもっているが、実践で出会う、より病理性の強い不安をもつ人の作品を検討してゆく必要がある。第三に、評定者が箱庭療法に精通した治療者でなかった点である。評定者を大学生とすることで印象の一般的な傾向を明らかにする一方、心理療法従事者に比べ、作品に大まかな印象をもつことが示された。作品をより詳細に捉えるためには、治療者による評定が必要であろう。また、治療者であれば、作品を見る過程で自身に生じた体験を吟味すると考えられる。治療者が自身の感情をどのように扱うのかという観点を含めて検討してゆく必要がある。

引用文献

- 荒井 真太郎 (2004). コラージュ作品における感情状態の表現について 関西国際大学研究紀要, **5**, 155-170.
(Arai, S. (2004). The expression of emotional states: In the works of collage. *Kansai University of International Studies*, **5**, 155-170.)
- 池上 知子 (1997). 社会的判断と感情 海保 博之 (編) “温かい認知”の心理学——認知と感情の融接現象の不思議—— 金子書房 pp. 99-119.
(Ikegami, T.)
- 岩堂 美智子・奈比川 美保子 (1970). 箱庭療法に関する基礎的研究 大阪市立大学家政学部紀要, **18**, 183-192.
(Iwado, M., & Nabikawa, M.)
- 角田 豊 (2004). 共感 氏原 寛・亀口 憲治・成田 善弘・東山 紘久・山中 康裕 (編) 心理臨床大事典 改訂版 培風館 pp. 211-213.
(Kakuta, Y.)
- Kalff, M. D. (1966). *Sandspiel: Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*. Zürich: Rascher Verlag.
(カルフ, M. D. 山中 康裕 (監訳) (1999). カルフ箱庭療法 新版 誠信書房)
- 河合 隼雄 (1966). 箱庭療法 (Sand-Play Technique)——技法と治療の意義について—— 京都市カウンセリングセンター研究紀要, **2**, 1-9.
(Kawai, H.)
- 河合 隼雄 (1969). 箱庭療法入門 誠信書房
(Kawai, H.)
- 河合 隼雄・中村 雄二郎 (1993). トボスの知——箱庭療法の世界—— TBS ブリタニカ
(Kawai, H., & Nakamura, Y.)
- 木村 晴子 (1985). 箱庭の見方に関する研究 河合 隼雄・山中 康裕 (編) 箱庭療法研究 2 誠信書房 pp. 183-213.
(Kimura, H.)
- 小林 孝雄 (2005). “共感的理解”を体験している治

- 療者の状態に関する理論的検討 臨床心理学, **29**, 673-683.
(Kobayashi, T. (2005). Theoretical investigation of the state of therapist's experience of "empathic understanding": A description by applying the cognitive theory and the experiencing theory. *Japanese Journal of Clinical Psychology*, **29**, 673-683.)
- Kris, E. (1952). *Psychoanalytic explorations in art*. New York: International Universities Press.
(クリス, E. 馬場 禮子 (訳) (1976). 現代精神分析双書 20 芸術の精神分析的研究 岩崎学術出版社)
- 森谷 寛之 (2004). コラージュ療法 氏原 寛・亀口 憲治・成田 善弘・東山 紘久・山中 康裕 (編) 心理臨床大事典 改訂版 培風館 pp. 397-399. (Moritani, H.)
- 大石 弘 (1980). 箱庭作品の発達的特徴と評定 山形大学紀要 (教育学), **7**, 441-451. (Oishi, H.)
- 岡田 康伸 (1969). SD 法によるサンドプレイ技法の研究 臨床心理学研究, **8**, 151-163.
(Okada, Y. (1969). A study of the sand play technique by means of the semantic differential method. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **8**, 151-163.)
- 小此木 啓吾・馬場 禮子 (1989). 新版 精神力動論 金子書房
(Okonogi, K., & Baba, R.)
- Sadock, B. J., & Sadock, V. A. (Eds.) (2003). *Kaplan and Sadock's synopsis of psychiatry: Behavioral sciences/clinical psychiatry*. 9th ed. Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.
(サドック, B. J.・サドック, V. A. 井上 令一・四宮 滋子 (監訳) (2004). カプラン臨床精神医学テキスト——DSM-IV-TR 診断基準の臨床への展開——第2版 メディカル・サイエンス・インターナショナル)
- 清水 秀美・今榮 国晴 (1981). State-Trait Anxiety Inventory の日本語版 (大学生用) の作成 教育心理学研究, **29**, 348-353.
(Shimizu, H., & Imae, K.)
- 相馬 壽明・行方 清子 (1989). 精神薄弱児の箱庭作品の特徴について 茨城大学教育学部紀要 (教育学), **38**, 153-172.
(Soma, T., & Namekata, K.)
- Spielberger, C. D. (1966). Theory and research on anxiety. In C. D. Spielberger (Ed.), *Anxiety: Current trends and theory*. New York: Academic Press. pp. 3-20.
- 寺崎 正治・岸本 陽一・古賀 愛人 (1992). 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
(Terasaki, M., Kishimoto, Y., & Koga, A. (1992). Construcion of a multiple mood scale. *Japanese Journal of Psychology*, **62**, 350-356.)

—— 2009. 5. 15 受稿, 2011. 9. 6 受理 ——